千載和歌集 上

九曜文庫

千載和歌集

やまとみことのうたハちはやぶる神代より
はじまりてならの葉の名におふ宮にひろ
まれりたましきのたひらの都にしてハ延喜の
ひしりのみよにハ古今集をえらはれ天暦の
かしこきおほん時にハ後撰集をあつめたまひ
花山の御時ハ拾遺集をえらひし白河のみよ
にハ後拾遺を勅せしめ堀川の先帝なりち
のうたとあつめてまつらしめ給ひおほやけそこれと
わざもりよの風俗としてこれをもてあそひて

はなをもよしのゝうしなはずひとのこゝろをは
こたえてとるきよしてあくらむとしかも
まれなこの世にむまれてむまれあそふこと
つゝときこえる人ハあまりにもてなさるゝ
ことゝおもさるハたとくなし　聖徳太子ハこれを
やまとのことのハ伝教大師ハわかたつそまの
ことゝとのこせりよりて世をかへみちに
なはとてありハかくとやまとしまの集とえら
ひあまふおこなとまれにあむおつるけるわが
こゝみよとをしるしめしてたるりつゝしめ給ふと

なつかしくなりけりさればかきおくとて
むかしのふみのまねしてかきとせひさし
かへさみさりとみえつきことはなひとこや
のたまはせけるかたことはおとさこそ菊の
みやびのよの世をもへさらひとしもさめ給ふ
まことにかしこきせくみそちあまり見えけり
の蓑蝶よなむなりふけつかまへこされかん
らくしみあさけしゆのかりまでとりひもろ
こまほんめくみえたるかそ花よりもかくて
しらくなれつゝまゐりもとこゝて侍ふ

あしひまでとひふもとありふのそ見えてむら
しくもはすなまけおりしそろかれの
おもひ秋の月はゆふへかりひとのへこゝろを
らここはとふとなしあらと紙よふとけ
の急志へとそのへかうときつれやまなりの
こられくと菊をかりそふ志さしゆかのみちを
はりふかこりても後のいつをなすへからも
ふくとの菊のやしむしるをと書し
こにいさしれ世乃見ちとこのむとももうれと
のたなしさらめし世うしのとさきのおり

まつをあらへのこゝろをもみそなはしむことあり
よりて後拾遺集をえらひのこされたる
こゝろみ正暦のころをひよりしも文治のいま
にいたるまてのやまとうたをえらひあつめてたてまつ
つるへきおほせことをうけたまはりけるのちかんとき
よもこれにとしはへりくちあらたまりて
かさし世はとしさかゆきたまふなくとしたまへる
まけつらそれはさかりくもとしひにを
いまゆくはさもあらふとゆるしむあ
このしふをなつけて千載和歌集といふ

又後拾遺集のゝちおほくし勅撰よあらす
らくえらひつところ金葉詞花のふたつ
のしふありしかとも部類もあらはれ
このかすもなくしてのこれることおほか
しかれはいまの世まてのうたをとり
えらひなしそもしこゝのえれたち
とゝめつゝことをいふよかしくし日のりとひ
ろさぬかれ見ちをもまなひをてしられ秘
のわしのみねのぬかさ見のつまをさとふ
みしもわれすそくなのよそちはまり

なくりしれちをいくすしてころあり
おりふしとことに菊は袖かせくいさはひあひ
かのひなからゆへに見えそりしおもはゆるを
めしとふよみつく詠けりのいろもや
くもれそことしのきこえしかは風なれ見ん
ことのはひよりすきさふくそりとの
おりつなるへし志らはおもしとも袖しとふを
こまいつよしくてかけそいよく
あかれりのいこれやまとうつろ見えあり
なんおもけつきるのこやしれ菊枕の山

かの菊はしこさいろく小玉に急くか
てとみくおりへまて山のなかれふる木なと
うつはうとおもひくなかはえぬおしおなしき
ぬしおもくとおりくなむかりけまとこる
このむきて給はしとあはれとうは見えちを
あやさくらんかあふらくのまれにしての
いかりのはとの菊をと見つふくつしを
こさくにはえさるをいかしすくとなし勅
しくみくふくりくちかまりそくしまれ
とせりいまへけうけ勅をうけあまたり

て集とえらはしおほひいそのくにおさまく
はつかいそのことはをそまつらをひけしくこれ
みちとゆるひふしそのこゝろをさとれる
ともからはしめをまつなりふまつのと
おそにのまこうけ乃ぬりしにたうまとろ
りのこれとえしくつおとなむなかりきれと
宇治山乃僧喜撰といひけるなむまてさき
乃かんとのりとうけたまはりてやまとうた
のしきさとはくまりける式とはくりたふ
とえしふみのむかしれおとにより いまこみ

なをらへおほうらへよわかれしき乃みちのり
あつさひくいなくらくのそうかうのたかふをまされたる
のこれなとつきこふはらへあそてまつりてむそ
ちふなんあまたなにられし家くのしくめて
うらくのりはくさうこれおほつめあそてまつ
なへさみとのりをとうけたまはるもの
ありしこれ集らこみのうひたうみとされ
ぬるいもみなしのまけの風ひはしを
はくこたうをねまはしめのなみなくたう
かふしてちてのたる秋ともこり世へれか

こりをとらさ〇仰しめや文治三乃とし秋な
か月のなかれとをうふえしひあてまつりあら
まゐむありけり

千載和歌集巻第一

春哥上

春たちける日よみ侍ける　　源俊頼朝臣

春のくるあしたの原をみわたせハ霞もけふそ立はしめける

堀河院の御時百首哥たてまつりける時よめる　　中納言国信

みむろ山谷にや春の立ぬらん雪のした水岩たゝく也

百首哥たてまつりける時はしめの春の心をよめる　　待賢門院堀河

雪ふかき岩のかけみちあとたゆるよしのゝ里も春ハきにけり

堀河院御時百首哥たてまつりけるとき残りの雪をよめる　　前中納言匡房

みちたえといとひし物を山里に消るハおしきこその雪

承暦二年内裏後番の哥合にのこんの雪をとよめる　　藤原顕綱朝臣

春きてハ雪の下水うちとけて谷の鶯いまそ鳴なる

後冷泉院の御時皇后宮の哥合によみ侍ける　　大納言隆国

山里はまた雪やふかゝらんかすまぬ山に鶯のなく

法性寺入道前太政おほいまうちきみ内大臣
に侍りける時十首の歌よませ侍りけり
よめる
源としよりの朝臣

煙かと室の八嶋をみし程にやかてもそらのかすみぬるかな

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りけるに
霞の歌とてよみ侍りける
摂政右大臣

霞しく春の志ほちをみわたせはみとりをわくる沖白波

堀河院の御時百首の歌の中に霞の歌とて
よめる
前中納言匡房

よろこひの神なひ山も春きてそ霞のころもたちかけゝる
みすりんのうたとてよめる
刑部卿頼輔

春来は秋乃しるしもみぬ代にも霞そたてる二嶋の山
太宰大弐隆房

みわたせはそことも志らぬ秋の野の霞のうちやとわたる山本

百首の歌たてまつりける時子日の心を
よめる
待賢門院のほりかは

ときはなる松もや春をしりぬらんはつねをいはふ人にひかれて

家に侍ける女房のもとに正月七日前中宮の女房わかなをつかはしたりけるをききて侍りける　治部卿通俊

みよし山雪の下草うち分て誰をとふひの若なつむらん

堀河院御時百首歌たてまつりけるうちわかなのうたとてよめる

源としよりの朝臣

春日野の雪を若菜に摘そへてけふさへ袖のしほれぬるかな

む月のつこもりころ雪のふりて侍けるあしたよその家の梅を折りて俊頼朝臣につかはし侍ける

権中納言俊忠

咲そむる梅の立えに降雪のかさなる数をとへとそ思ふ

返し

源俊頼朝臣

梅かえにふんをもゆきそかさなるをしらてや人のとふとみえん

梅の木に雪のふりかかれるに鶯のなきけれはよめる

左京大夫顕輔

梅かえにふりつむ雪は鶯のはかせにちるも花とこそみれ

永保二年二月さかいの家にて梅花久薫といふこころをよみ侍ける

久我前太政大臣

くる春もえせぬ春は梅花吹くる風やのどけかるらん

ほりかはの院の御時百首哥たてまつりける
時梅花の哥とてよめる

大納言師頼

いまよりは梅咲宿は心せむまたぬにきます人もありけり

前中納言匡房

にほひをそしるへにてまつ梅花それともみえぬ春よの月

崇徳院に百首哥たてまつりける時よ
みける

大炊御門右大臣

梅花おりてかさしにさしつれは家にありつる香とそみる

題不知

いつみしきふ

梅かゝにおとろかれつゝ春のよのやみこそ人はあくからしけれ

藤原道信朝臣

いつくより風や吹らん花の香のあまりにふかくそらにほふなり

皇太后宮大夫俊成

春の夜はのきはの梅をもる月の光もかほる心ちこそすれ

百首の哥めしける時梅の哥とてよませ
給ひける

崇徳院御製

春の夜は吹まふ風のうつり香を木毎に梅と思ひけるかな

梅花夜薫といへる心をよめる

源俊頼朝臣

梅かゝは垣ねはよあくかれてまやの軒よひまなくむすほ
匂しらす　みされおもひはまちかねし

梅か香に思ひいりせは鴬のなく一枝はおしまゝし
仁和寺二品法親王守覚

梅か枝に花にふるへくひまなく思はへ白に春の日かす
権大納言実家

風ふけは新ゐの梅に鴬のなきそこつゝふるゝ花の香を
中院にありける梅のおもしろくさきたるを
さむらひともまうてきたるとそのとし二月はかりにさ

身のおもしろくさかりなるにむまひつれて皇太后
宮大弐俊成のもとにつかはしける
大納言定房

昔よりちらさぬ宿の梅花ことしもいろにかはらん
堀河院の御時百首の哥たてまつりける時
春雨をよめる　前中納言匡房

よも山にこのめ春雨ふりぬれはそれかとやむかしのおもかけ
藤原ゆきとし

春雨ふりしそめしよりあをやきの糸の緑そまさる
あいしらす　いつとたえさふ

つゝくとふれハ波のあやかくと見れりのとや人ハみへたん
堀川院乃御時百首乃歌奉りける時
ひとよめる
藤原基俊
た山木の陰のしたに下蔭いつまでとも志ら雲かな
崇徳院に百首の歌奉りける時雲の歌
とてよめる
藤原清輔朝臣
月こそ見し荒ぶる葉やうえみ玉江の沼とはらふ 雲の
堀河院の御時百首の歌のうちに雲の歌
とくよめる
源俊頼朝臣
雲まハたのむかりも今はとて帰る雲ちにしをひさらむ

くもかゝれるこゝろをよみ侍りける
左近中将良経
なかむれハ千里すめる空にもかゝる雲とひとつに成てかゝるなかめよ
従三位頼政
あま河原ひかりまみえこの海の波とゝもにかゝる雲
祝部宿禰成仲
海の面にくものとゝもにはなれいる月とあくへてそやみ
崇徳院に百首の歌奉りける時雲の歌を
てよめる
藤原季通朝臣
雲ハ行花の色とも見えもわかす峯にさきたるは暖

百首歌めしける時春のうたとてよませ給うける　崇徳院御製

朝夕に花まつころは思ひねの夢のうちにぞさきはしめける

待賢門院堀川

いかにせん花さかりなんと思ふより霞める山ぞまちとほなる

白河院かくれ給ひし後しのひて御幸ありけるに
めしありけれはみやこへまゐりて侍りける　京極前太政おほいまうち君

山桜ことしもさこそにほふらめ花のにほひは

鳥羽院位おりさせ給ひてのち白河に御
幸ありて花御らんしける日よみ侍りける　花園左大臣

けさよりも花の鏡となれるかなのどかにすめる白河の水

徳大寺左大臣

万代のためしに見えしやまふかくれむもうつしとゞめよ白河の水

近衛殿にわたらせ給ひてかへらせたまひける
日遠尋山花といふ心をよませ給ひける　崇徳院御製

尋つる花のあたりになりにけり匂ふにしるし春の山風

法性寺入道前太政大臣

ゆふさといそぬ程のたかねは長実よみけるもいと遠
寛治八年さきのおほきまうちきみの
高陽院の家にて歌合にさくらの歌とて
よめる
中納言女王
山桜咲ぬる時は常よりも峯の白雲たちまさるかな
藤原顕綱朝臣
花ゆへにしらぬ山そなかりけるまとふは春の霞なりけり
京極の家にて十種供養し侍りける時白河
院みゆきせさせ給ひて又の日前斎院まゐらせ給ふ
よよみ侍ける
京極前おほきおほいまうちきみ

桜花あかぬ心の春にあはぬまてとこそ思ふかな散らぬ世もやと遠くせん
後二条関白内大臣
花さかり春は山へとみるせはいつくへ行か今日もちらすそす
右衛門督基忠
咲そむるものかたりは春なから絶せぬ宿のみゆきをそみる
毎朔見花といふ事をよみ侍ける
中院右のおほいまうちきみ
朝ことにたかき桜のにほひよ花は枝なるあまたなるまて
東山にて花見侍りける日よみ侍ける
大のおほいまうちきみ

色ふかくやなほしまちかねに花咲この世にあはせ
十首乃哥人〃によませ侍ける時花の哥とて
よみ侍ける　　前左大臣光
見ん人のよそにむかし桜されて志ほとふかき花尽
崇徳院に百首の哥奉りける時花の
哥とてよめる　　左京大夫あきすけ
かつらきやたかまの山の桜花雲井のよそにみてやすきなん
前参議教長
山桜千すゝ幾らありとはちらさきまら風そしらする
藤原清輔朝臣

神なひのみむろの山は春きてそ花のしらゆふかけてみえける
遠思山花といふことを
仁和寺後入道法親王覚性
乗すゝものゝ匂ひをとひやらんやまゝの中に桜ねしらん
尋深山花といへる心をよみ侍ける
摂政前右大臣
いさぬやとたつねぬ山ちに見えしかといつものゝしるしなりけり
尋花日暮といへる心をよめる
源としよりの朝臣
くれそぬるいはなかれし山桜あるたなかさそはるけふしる

花のうたとてよめる
道因法師
花散はしね山ちかゝれとゆふは春のへにかきり
賀茂の社乃歌合とて人ゝよみ侍ける時の
歌とてよめる
菅原在時朝臣
年ふへて雲居の桜のさかりにそあかぬは春の心なりけり
藤原為綱臣
花さかりよその山まてはるゝまて春は心の身にそはぬ
春日乃社の歌合とて人ゝよみ侍ける時よ
める
顕昭法師
吉野川見わたせはみきはをさとにまかふ白波
散ての後もあかぬ心をよみ侍ける
よみ人しらす
行道やしられ彼はなほほ世を昔のことゝ山行られ
日吉乃社の歌合とて人ゝよみ侍りしに
よめる
祝部宿祢成仲
さゝ波やしかの花そ見るからにひとしれぬ人の心そそふ
花の歌とてよめる
賀茂成保
ちるかの桜咲なるは梢にちりかゝるらむ波
慈位法師

かすみしくものゝはらに数まさり山のいとにほふ志ら雲

藤原為業 法名寂念

芳野山花のさかりに成ぬれはみな河なさきの白雲

毎春も芳といつらんとよめる

源仲正

春くれは匂ひそそふる山桜花は老こそちりぬけれ

百とせの春にあまれる時よりそ待けり

待賢門院堀河

白雲とみねの桜はみゆれとも月の光はへたてさりけり

上西門院兵衛

花の色に光さしそふ春の夜そこのまの月はみるへかりけり

歌合し侍る時花のうたとてよめる

太宰大弐重家

たくひなき花のさかりとみゆる世は霞にまかふ峰の白雲

藤原範綱

さゝなみやしかの山ちのはなさかりみちをや人のものさひしき

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とて

よみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

三芳野の花のさかりをけふみれはこしのしらねに

春風そふく

千載和歌集巻第二

春哥下

鳥羽殿にわたらせ給へりける比常見花といふ
こゝろを人々つかうまつりけるついでに
よませ給ける　白河院御製

咲しよりちりはつるまでみしほどに花のもとにも日数へにけり

みこのみやと申ける時鳥羽殿にわたりて侍せ
給へりける比池上花といへる心をよませ給ける

院御製

池水にみぎはの桜ちりしきて波の花こそさかりなりけれ

山花のこゝろをよみ侍ける

大宮前太政おほいまうち君

白雲とみねにはみえて桜花ちれば麓の雪にぞありける

百首哥たてまつりける時花の哥とてよめる

藤原季通朝臣

芳野山花はなかばにちりにけりたえだえのこるみねの白雲

寛治八年関白さきのおほきおほいまうちきみ
高陽院の家の哥合にさくらをよめる

周防内侍

山桜おしむ心のいくたびかちるこのもとにゆきかへるらん

後朱雀院のおほん時うへのをのこともをへし
山の花見侍けるに西ぬれは白河殿よ
とまりてよめるうたよみ侍けるによみ侍る

大納言長家

春雨にちる花みれはかきくらしみそれし空の心ちこそすれ

落花満山路といへる心をよめる

上東門院出羽弁

ゆかはおしふまてはゆかむ方もまよひぬちりしく花の山路くらはなし

堀河院の御時百首歌たてまつりける時桜を
よめる

前中納言匡房

山桜ちりにしのちそこそは散花とにそふやおもふ華

藤原仲実朝臣

花のちる木陰ては雪のつもりそめぬ桜なるらむ

藤原りとし

春をへてちらしやおしむ山の風と桜のうへにふくらむ

崇徳院の御時十首歌たてまつりける時花
の歌とてよみ侍る　右兵衛督公行

嵐吹志賀の山への桜花ちるまは雲かふにし波そたつ

百首歌たてまつりける時花の歌とてよめる

前参議親隆

春風に志賀の山越花ちれは峯にそ浦の波はたちける
花の歌とてよみ侍ける
左近中将良経
桜咲比良の山風吹まゝに花になりゆく志賀の浦浪
花留客といへるこゝろをよみ侍ける
右近大将實房
散かゝる花の錦はきたれともかへらんことそわすれにける
落花のこゝろをよみ侍ける
権大納言実国
あかなくに袖にとめはちるもとを嬉しとやすく成あへる哉

久我内大臣の家にて男ともまゐりて花をおしむといへるこゝろをよめる
権中納言通親
桜花さかりにふる家ゐはいさて散をおしまゝし
花のうたとてよめる
俊恵法師
見よし野の山下風やはらふらん梢にあまる花の志ら雪
源有房
一枝はおりてかへらん山さくら風にのみやはちらしはつへき
道因法師

散花を身にふかりしへともなそ色よけれ

覚盛法師

あかなくに散ぬるものゝ面影や世にとゝまらぬ桜なるらん

源仲綱

山桜ちるをみてこそ思ひしれたつねぬ人は心ありけり

さくらのちりけるをみてよみ侍る

道命法師

よそにてそうさくへりきる桜花めのまへにふるとしらつゝ

池ノ桜のちるをみてよみ侍りける

能因法師

桜ちる水の面にはせきとむる花のしからみかくへかりけり

花浮洞水といふことをよみ侍ける

花園左大臣

嵐よりちりつむ花しなかりせはいかてしらまし岩の下水

山家落花といふ心をよめる

前大納言俊實

花のみなちりての後そ山里のはらはぬ庭は見るへかりける

花落客稀といふことをよめる

藤原基俊

あそはむもそいとこしの花ちりぬる後はとふ人もなし

みちのくにまかりける時なこそのせきにて花
のちりけれはよめる　源義家朝臣

吹風をなこそのせきとおもへとも道もせにちる山さくらかな
なかのひむかしの山のくにのうつりける花を見て給

九月日僧都澄観か房にてこれかれまうてみ
侍るによめる　源仲正

しらさゆき宮の山のかせそ吹さえぬかりせる雪かとそみゆる

百首の歌よみてたてまつりける時春の歌とて
よめる　前参議親隆

くみ山光はものの見をけましいちりつゝそてそさひしかられ

藤原きよみち朝臣

ふりぬれ我か身なれとも浦のまつ難波の春にかすみこめけり

堀河院の御時百首の歌たてまつりけるによめる　前中納言匡房

しふとちりまやしけきにそ高砂のこれ春の尾上鳴也
花ある　百首の歌たてまつりけるによめる　中納言国信

ことしひねて摘て帰るの人もみえ咲なの芝生は霧しきもなし　修理大夫顕季

雉子鳴いはたのをのゝつほすみれしめさすはかりなりにけるかな

寿永二年さくらゐの家にて会ありしに
よめる
源頼国朝臣
みちとせにみなる桃のつゆすらふ春の風に摘て行ん
かさねつゝの伝れ此時の百年ならむ山吹をよ
める
前中納言匡房
春ふかみ井手の川瀬の影そへていつみもしむ山吹の花
藤原基俊
山吹の花の枝よりかはつなきてなさくへいまやとはし
堀河院の御時肥後か局より山吹おりを
さゝらしめて見ありけるはまつとてむさ
ひつを給ける
二条太皇太后宮肥後
九重にやへ山吹をうつしては井手の蛙の心をそくむ
又名も款冬といふ心をよめる
藤原範綱
芳野川岸の山吹咲ぬれは底にそふかき色はみえける
藤原定経
しらなみの色そてすめる款冬の花の下ゆく井手の川つら
款冬をよめる
惟宗広言
いろをは春とゝめてとまるともやへにさく咲山吹の花
百首の歌たてまつりける時款冬の歌とて読る

藤原清輔

山吹の花のつまとはきかねとも先うつろふ藤に鳴蛙かな

はちみちの左大臣の家にて歌合し侍りけるに
藤花とよめる　康資王母

よそにても匂ひますらん藤のむらさきと衣とも岸をこそ

永承六年内裏の歌合に藤花をよみ侍りける　中納言祐家

九重にさきぬとみれは藤の花こき紫の雲そたちける

百首歌奉りける時よみ侍りける　大炊御門右大臣公能

年ふれとかはらぬ松をたのみてやかゝりそめけむ池の藤浪

やよひのつこもりころ白河殿にまかりて人人の歌ありけるに暮春残二日といふことを
人のこともはかりまつりきたつるに
よませ給ひける　二條院御製

我も又春とゝもにやたちなましあとをいりそといふらはしゝて

百首の歌めしける時暮の春の心をよませ
たまひける　崇徳院御製

花は根に鳥はふるさとに帰るなり春のとまりをしる人そなき

やよひのつこもりまてによみ侍りける

中務卿具平のみこ
今日のみとおもひしむ春のをしまれしとおもひくらしてくらしつる哉

式子内親王
なかむれは思ひやるへきかたそなき春のかきりの夕暮の空

百首歌たてまつりける時くれの春の心を
よみ侍ける

大納言公澄季
今そしる春は限りもあるものををしむ心のつきせさりける

三月盡乃心をよみ侍ける

久我内大臣
今日さへは山のはへそらしめさく暮ては春のとまりやなは

藤原定成
我とりきぬわか身おもへはおしむさは春のなこりのとゝか

源仲經
身なからも花みし頃はわすれしに春の別をおしむものかな

藤原經家朝臣
いつとても春の別はおしけれとこよひはむかしのさかりなりけん

別路三月盡といふことをよめる

琳賢法師
ゆく花にあかぬ歎は出かへつれなくも春にはゝれぬる哉

三月盡乃日皇太后宮大夫俊成かもとに遣て

つもりける

法印静賢

花はみな空に嵐よはそひてそ秋や春のかふはあらん

閏三月尽によみ侍ける

権大僧都範玄

もの春さらにひそなりきちぬ日数のそへてそある
らん

閏三月尽といふ心をよめる

前大僧正覚忠

をしめともひとなれさふに春くれは波とともにそ立別るゝ

堀河院の御時百首歌奉りける

春乃くれをよめる

前中納言匡房

常よりもきのふのくれをおしむまいかひの春を知る
人

前斎宮河内

くれぬる花のちりしくそのもとにそおもはしねてくる春

りのさとそよ

千載和歌集巻第三

夏歌

堀河院の御時百首歌たてまつりける時更衣のこころをよみ侍ける

前中納言匡房

なつ衣花の袂にぬきかへて春の形見もとまらさりけり

藤原基俊

けさかふる蝉の羽衣きてみれは袂に夏はまつそきにける

崇徳院に百首歌たてまつりける時夏のはしめの歌とてよめる

藤原実清朝臣

あそゆく春の別はいにしへの人やう月といひはしめけん

卯花をよめる

左京大夫顕輔

ひろくふはまる垣ねの卯花は本かまの月のひかりとそみれ

暮見卯花といへる心をよみ侍ける

右近大将実房

夕月夜ほのめく影も卯の花のさけるわたりはさやけかりけり

卯花の歌とてよみ侍ける

仁和寺後入道法親王覚性

玉川と音にきこえしは卯花の露かさねたる名にこそありけれ

白河院鳥羽殿にわたらせ給ける時おのことも

歌合し侍けるに卯花をよめる

藤原季通朝臣

見てすくる人しなけれは卯花のさける垣ねや白川のせき

遠村卯花といふことをよめる

賀茂政平

卯花のよそめなりけり山里のかきねはかりにふれる白雪

卯花籬宅といふことをよめる

藤原敦經朝臣

うれしくものきはのさとのとなりやとしら川のなかせやふかき

山さとにこれもまたゆりてうちよせ侍まつよ野

草をよめる

藤原定通

焼すてしふるのゝをのゝま葛原玉まくはかり成にけるかな

堀河院の御時百首歌奉りける時

葵をよめる

藤原基俊

葵草てる日は神のこゝろかは影さすかたにまつなひくらん（やイ）

賀茂のいつきおりたまひてのちまつりの

みあれの日人のあふひをたてまつりて

侍りけるにかきつけ侍ける

式子内親王

神山の麓になれし葵草ひき別てもとしそへにける

仁和寺にて人々に郭公の歌よみ
侍けるによめる　按察使公通
時鳥まつはひさしき夏の夜をねぬにあけぬと誰かいひけん
修理大夫顕季家の歌合し侍けるに郭公を
よめる　藤原道経
二声ときかでややまむ時鳥まつにねぬよの数はつもりて
かくこさすれ寺にてよめる
賀茂重保
郭公声のふるは山ひこのこたふる声をきくのみぞする
山寺にこもりて侍けるに時鳥なかざりけ
れはよめる　道命法師
おやまさは待人からの時鳥なかぬよはにもあかす袖ぬれ
題しらず　康資王母
ね覚せぬたくひにさへは郭公はしき人をも待経る
刑部卿頼輔母
時鳥又もやかたと待てこそしほとも稀られけれ
覚盛法師
まてこそ人よとへや時鳥さてこそ初音やうれしかるらん
崇徳院に百首歌たてまつりける時読る
前参議教長

鳴てとさくへきものを時鳥今そのめあかつきの一声

遠聞郭公といへる心をよみ侍ける

権大納言実家

こゑはやなをもつゝまぬ時鳥雲のいくへのかなたなるらん

暮天郭公といへるこゝろをよみ侍ける

仁和寺二品法親王守覚

郭公なをゆふ暮と思ふ山のかたの雲ゐのそらに鳴なり

時鳥の歌とてよめる

藤原清輔朝臣

きこえしとなくなるまては時鳥ぬれての雲ゐのそらに鳴なり

従二位頼政 前右京権大夫

一声はなやかに鳴て時鳥雲ちはるかにとほさかるなり

右大臣に侍ける時家に百首歌よませ

侍けるに時鳥の歌とてよみ侍ける

摂政前右大臣

出ぬとなき月ありせは時鳥なほさくらよとおもはまし

暁聞郭公といへる心をよみ侍ける

右大臣

時鳥鳴つるかたをなかむれはたゝ有明の月そのこれる

かくこそ次のうたとてよみ侍ける

権大納言實國

花散て色ならぬ郭公こそかくれし宿と思ふや

権大納言宗家

ゆくよひらの森木くれはかのつになれる郭公かれ

前左兵衛督公光

郭公こゑをもわかぬ一声に異方の里もなかめつるかな

摂政太政大臣の時の哥合に郭公とて

よめる

皇太后宮大夫俊成

よあからの稲のね覚の郭公声ハ枕にあるここちして

右近大将実房中納言に侍ける時十五首哥よませ侍けるに

道因法師

来とさへ待ぬより外に郭公いかにまちてか二声ハきく

郭公とよみ侍ける

権中納言長方

心をそつくしはてつる郭公ほのめくよひのむら雨の空

これ内大臣乃家にて郭公菖蒲といふ心をよめる

前中納言雅頼

都人ひさかほしそあやめ草かりねのとこの枕なりけり

菖蒲乃うたとてよみ侍ける

摂政右大臣

五月雨はねまくひくむらやめ草沼の岩かき波もこそ越せ

内大臣

わかやとにとまるへき時鳥ねをやわかやかにきゝてかへらん

後朱雀院の御時長久二年五月一日内親

王の歌合に花たちはなをよめる

枇杷殿皇太后宮五節

あからぬ花橘乃匂ひ我よそふる袖に年へてなけ

題不知

藤原基俊

風にちる花たちはなに袖しめて我おもふいもか手枕にせん

藤原家基

うき雲のいさよふよゐの村雨におひ風しるくにほふ立花

右大弁親宗

我宿乃花橘に吹風をたか里よりとたれなかむらん

花橘薫枕といふことをよめる

藤原公衡朝臣

おもひねの花橘のかほるかなむかしをしのふ夢のまくらに

百首のうためしける時花橘の歌とてよませ

給ひける

崇徳院御製

五月雨に花たちはなのかをるよは月すむ秋もさもあらはあれ

題不知

延久第三親王輔仁

ほとゝれは思ひそやるいにしへの草のいほりの板まはらさ

堀河院の御時百首の哥たてまつりける
時五月雨の哥とてよめる

藤原基俊

いとゝしく賤の庵のいふせきに卯花くたし五月雨そする

源俊頼朝臣

おほかた河たえるへき絶人のとふやさゝれもの宿

中院入道右大臣中将に侍りける時哥合
侍りけるに五月雨の哥とてよめる

藤原顕仲朝臣

五月雨はあさかのぬまの花かつみかつみるまゝにかくれゆく哉

崇徳院に百首の哥たてまつりける時読る

左京大夫顕輔

五月雨の日数へぬれは刈つみし志河やなにまけ朽やしぬらん

前参議親隆

はこまへはおのみつさやまはかけし見えねの底とみえけり

皇太后宮大夫俊成

五月雨はたく藻の煙うちしめりしほたれまさるすまの浦人

藤原清輔朝臣

時しもあれたつのみこもと苅ねさてそてくたしつ五月雨の比

待賢門院堀河

五月雨はおもひしりけり家持しまゐりし人にも煙あそて拵

摂政右大臣に侍りける時百首歌よませ侍り
けるに五月雨の心をよめる

源行頼朝臣

さみだれは室の八島を見てましや煙は浪の上よりぞたつ

旅泊五月といへる心をよめる

源仲正

五月雨はうみの室にも袖ぬれてあかざりしわかれの波かさねや

月前郭公といへる心をよめる

賀茂成保

五月雨の雲の晴まに月(たえり)さえて山時鳥空になくなり

雨中郭公といへる心をよみ侍りける

按察使資賢

かきくもりあやめもさだけ時鳥まいくかはこえなきそ

閑路郭公といへることをよめる

中納言師時

相坂の山時鳥なのるなりせきもる神や空にきくらん

後一条院の御八講に菩提樹院にまゐり
侍りけるにかへるさに時鳥のなきければ
よめる

律師慶暹

いつへと思ひつゝひとりこえくるハなさおれ山のかけちさすか

瞻西上人雲居寺の房にて郭公をき
ゝて読侍ける　源俊頼朝臣

なきてらくこゑひそめきゝん時鳥雲井乃山乃清水なるらん

堀河院の御時きさいの宮にて五月郭公
といふ心を読侍ける　権中納言俊忠

五月やみふかきみ山の時鳥峯つゝきなくこゑをきかは

おなし時百首の哥奉りける時照射
のこゝろをよみ侍ける
前中納言匡房

ともする宮きか原の下露にしのふもちすりかはくよそなき

修理大夫顕季

さ月やみさ山の峯にともすひは雲のたえまの星かとそみる

権中納言俊忠中将にて侍ける時哥あはせ
し侍けるに照射の哥とてよめる
藤原顕輔卿

五月やみしけきさ山にたつ鹿はともしのゝさくへしるそ
ともしといふことをよめる
大蔵卿行宗

ともすなるほくしの松も消なくにと山乃雲のあけわたるらん

源仲正

とりすかしの松をりえつきそ(さえつきけり)ゆふかきりくらのやまかな

よみ人しらず

山ふかみかしの雲はつきぬとも嫌はさひともなきころかな

賀茂重保

ほとゝきすかたらひし妻とおもへやあひそて嫌はしをとめかみ

百首の歌めてさふりける時蛍の歌とて

よめる

藤原季通朝臣

昔わかあつめし窓と思ふにも見んなれゆかしとふ蛍かな

題不知

源俊頼朝臣

あさましやみなかみにゐる蛍にも思ひてゆくへき此世と思ふ

なからへて見んさひしさよとらしまてそおもひなきさの蛍なる

水草隔船といへる心をよみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

夏ふかみ玉江にしけるあしの葉のそよくや舟のかよふなるらん

百首歌の中に鵜川の心をよみ侍りける

崇徳院御製

はや瀬川みをさかのほる鵜飼舟まつ此世にもいかゝくるしき

なてしこの花のちりかゝりけるをみてよめる

和泉式部

見るに猶この世の物とおもほえぬからしこのもとそすゝしき

松下逐涼といふことをよみける

中務卿具平親王

常夏のもとをわきまて松風を枝の陰にてきくは道なる

氷室をよみ侍ける

仁和寺後入道法親王 覚性

春秋ものしらぬ形見はかれ物をひむろそ冬の形見なりける

百首乃哥たてまつりける時氷室乃哥とてよ
み侍ける

大炊御門右大臣

あたりは涼しかりけり氷室山まかせし水のこほるなりけり

題しらす

法印慈円

山里や岩もる志水の音はえて夜のかつら日くらしの声

藤原道経

夕たちは玉ちる数もみてなかせきに小川の音そ涼しき

俊恵法師

いかはかり清水を宿にせきとめてかよふ夜をすゝしつるかな

顕昭法師

なかぬるも光すゝしき夏の夜の月を清水にやとしつる哉

泉辺納涼といふ心をよめる

法眼実快

せきいるゝ山下水にみかくれてすゝしきかけを結ふのゝきハ

夏夜暁月といふ心をよめる

藤原経家朝臣

我かたに経ゆく夜半や杉たてる杉山のはにたなひく有明の月

夜月をよめる

祝部宿祢成仲

夏の夜の月の光ハみしかくハふかしあまのいはとなからん

雨後月明といふ心をよめる

俊恵法師

夕立のまゝに晴やらぬ雲まよりおほろともみえぬ月影

大宮前太政大臣の家にて夜月如秋といふ

心をよめる

藤原敦仲

小萩原また花さかぬ宮城野の鹿やこよひの月に鳴らん

草花先秋といふ心をよめる

那昭法師

夜もすからその原とおもふものハおりあへぬ萩の花さくと

松風秋近といふ心をよめる

藤原親盛

妹か世ハ波といふもやこえぬ夏衣まきこしにまきて未の

刑部つゝりよけなる合し待まつに納涼乃心

をよめる

前参議教長

岩ねこし岩のかけちをとほりて夜ふかくまかる山の里

藤原盛方朝臣

いはまよりおちくる瀧の白糸はむすはてみるも涼しかりけり

百首哥奉りける時六月祓をよめる

藤原季通朝臣

夕くれはあきのけしきにゆふかけて夜ふかき月のみそきをそする

皇太后宮大夫俊成

みそきしてやはらく神の月をみそれはしらす夜半の叢

六月祓をよめる

よみ人しらす

見そきする川瀬にはやや夏をおくるらんくるまもりとに

秋のはしめつかた

千載和歌集巻第四

秋歌上

秋立日読侍ける　　侍従乳母

秋くと聞つるからに我宿の荻の葉風の吹かはるらん

仁和寺二品法親王 守覚

あさちふの露けくもあるか秋きぬとめにはさやかにみえぬけれと

百首歌たてまつりける時秋歌とてよめる

待賢門院堀河

秋のくる気色の森の下風にたちそふものは哀なりけり

皇太后宮大夫俊成

八重葎さしこもりにし蓬生にいかてか秋のわけてきつらん

はしめの秋のこころをよめる

寂然法師

秋はきぬ年もなかばにすきぬとや荻吹風のおとろかすらん

よみ人しらす

木葉なほふる色清く庭はおなしと秋の世ふけはちら涙れ

社頭立秋といふ心をよめる

賀茂重政

神山の松ふく風もけふよりは色はかはらて音そ身にしむ

郁芳門院の前栽合に荻をよめる

大納言経宗

物ことに秋の空色ハしらるれと見えすそむハ萩の色ハせ

たしめ丸妹乃心をよめる

源俊頼朝臣

秋風や涼りよかひと妻かるらん女を遣より袖のかへしね

七夕乃こころをよみ侍ける

摂政前右大臣

織女のふみちやいかにかるらん雨ちにきふの夕まくれかな

百首乃歌奉てさふらひける時七夕乃心をよめる

大納言隆季

七夕のあまつひれふく秋風にやそ乃舟川をと舟出すらせ

堀川院の御時百首乃哥奉てさふらひける時よみ侍ける

二条太皇太后宮肥後

七夕乃あまの羽衣重ねてもあかぬ契りや猶むすふらん

前斎宮河内

忘てこよひハりやせ七夕乃枕よちかきのつらくもあらん

七夕乃心をよめる

源俊頼朝臣

織女のあまのいはまくら岩枕かりしもそてなかきぬにこの秋ハ

百首乃歌の中に七夕乃心をよませ給ひける

崇徳院御製

織女は花深衣かさぬれハあまつさ露のうへになきとまり

七夕後朝のこゝろをよみ侍ける

土御門右大臣

あまの川そてくらへしふかき袖そあまれ何なかにきまさる

堀川院の御時百首の歌たてまつりける時

刈萱をよみ侍ける

大納言師頼

秋の野は思ひこゝろにかるかやの下葉や人のこゝろみたれん

延久二年親王家甲斐

かゝみ草葉末のうへを吹風にみたれてしける野へのかるかや

雲居寺瞻西上人房にて歌合し侍ける
時よめる

藤原道経

踏しだきあさゆく鹿や過ぬらんしとろにみゆる野ちのかるかや

草秋若秋といふこゝろをよめる

法印静賢

様さね風も告てし山里にみをとゝめかす花すゝき
思しらす

よみ人しらす

いつまてかいふかくとまて秋風にたてはまてとの野風なりや

和泉式部

人もかなみせもきかせも萩の花咲夕影のひくらしの声

藤原伊家

秋山の紅葉ともにむらさきはあらそめて錦なりけり

藤原基俊

宮城野の萩やをしかの妻ならん花咲しより声のかはれる

長覚法師

心とは千種の色にそめしかと袖にうつるは萩か花すり

堀河院の御時百首歌奉りける時よみ侍りける

大納言師頼

露しけきあしたの原の女郎花一枝をらん袖はぬるとも

法性寺入道前太政大臣家にて女郎花随風といふ心をよめる

前中納言雅兼

女郎花なひくとみれは秋風の吹くる末もなつかしきかな

なやみて侍る時をみなへしを人のおこせて侍りけれはよみ侍りける

右衛門督公光

なにとなく涙に露やおきそふらんみるにつけても袖の上乾しらす

藤原経家

吹風にむすほゝれぬる女郎花も難そ花のまゝにみえける

摂政前太政大臣家にて歌合し侍りけるとき野径秋夕といふ心をよめる

藤原盛方朝臣

夕暮はやまちにかゝらす出れはとは分つゝゆく

堀河院の御時百首歌たてまつりけるとき

よめる　源俊頼朝臣

ゆふまくれ心そとゆる家さひて花のちるらん出れは恋しく

野花留客といふ事をよめる

妹か家は宿にと人の尋ねて野へそつれ柄ありけれ

百首歌たてまつりける時秋の歌とて

よめる　藤原季通朝臣

野分する野への里とみる時心あさへおしともそふ

皇太后宮大夫俊成

夕されは野への秋風身にしみて鶉鳴なり深草のさと

題しらす　源俊頼朝臣

なにとなく物そかなしき菅原や伏見の里の秋の夕暮

百首歌よませ給ける時草花の心をよみ給

ける　摂政前右大臣

ゆふまくれのむしとは宿にも棲は庵のねさそふ野への秋風

草花露といふことをよみ侍ける

仁和寺二品親王　守覚

秋の野の千種の色にうつろへは花そかへりて露を染ける

題しらす　法印慈円

草木まて秋の哀をしのへはや野にも山にも露こほるらん

崇徳院に百首哥たてまつりける時

待賢門院堀河

あはれさと我身のうへにまさるは袖よりほかの蛛の夕霧

藤原清輔朝臣

龍田姫かさしの玉のをゝよはみ乱にけりとみゆる白露

藤原季経朝臣

夕まくれ荻ふく風の音きけは袂よりこそ露はこほるれ

俊恵法師

たくへ乃露にはなにのなるならん袂におくは涙なりけり

法輪寺に詣して侍るに嵯峨野の花を
見てよめる

道命法師

花薄まねくはゆかりとしりなからとゝまる身の心なりけり

久しくまからす侍ける所に秋深まりにけるを
見てよみ侍ける　前大納言公任

時しもあれ秋ふるさとゝきてみれは庭は野へとも成にけるかな

つたへきく山さとゝしりなから前栽のいくしほなりけるは
よめる

小弁

やまさとていくよもあかぬに庵のかへ秋乃声へともおもはし

思野花といふことをよめる

藤原伊家

草はしもかれに出ぬらん東路のいはたのをのゝしのふもちすり

秋の哥とてよみ侍ける

攝政前右大臣

夕暮はをのゝあさちに玉ぬきて心くたくる秋風そふく

前大僧正覚忠

ときはなるあをはの山も秋くれはいろこそかへねさひしかりけり

月の哥あまたよみ侍ける時よめる

権大納言實家

秋のくれんとゆくもめくとそわかなかむる又ゆくよな

月哥三十首よませ侍ける時よみ侍ける

法性寺入道前太政大臣

秋の月高ねの雲のあなたにて晴ゆく空のくるゝまちけり

堀河院御時百首哥奉りける時よめる

源俊頼朝臣

こからしの雲吹はらふ高ねよりさえても月のすみのほるかな

澄源法師

いつこにも月はわかしをいかなれはさやけかるらんさらしなの山

攝政前右大臣家に百首哥よませ侍ける時月

のこりてもみつ

藤原隆信朝臣

出ぬより月みよとこそはらふらめ雲はれかたの山の夕風

月の哥とてよみ侍ける

前中納言雅頼

くもりなきみそらに殊の月出ては庭まて照れぬ秋もなく

皇太后宮大夫俊成十首の哥よみ侍ける

時よみてつかはしける月の哥

右大臣

月それはそらにかはしあれ山をもめくらす袖にこそ見ゆ

権中納言俊忠卿の家にて夜上月といふ

心をよみ侍ける

源俊頼朝臣

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる波に月やとり

百首の哥の中に月の哥とてよませ給う

ける

崇徳院御製

玉よするうらわの風に空晴て光をかはす秋の夜の月

大炊御門右大臣

いつもみる富士の高ねはいかならむ月は雲ゐりやくもりなからん

皇太后宮大夫俊成

石はしる水の白玉数みえて清滝川にすめる月かけ

藤原清輔朝臣

しかの浦の吹風に雲晴てやそしまかけてすめる月影

法性寺入道前太政大臣に哥よみけるとき
月毎秋友といふことをよませ給ける時よめる

源俊頼朝臣

ことひくまかへても年の色あらはかりのいひの世秋のよの月

題不知

藤原基俊

山のはにますみの鏡かけたりとみゆるは月のいつるなりけり

藤原道経

秋の夜やあまのみる世にあるらん月の光のさえまさるかな

法性寺入道前太政大臣家に月の哥よませ
給ける時よめる

太宰大弐重家

嵐ふくなかき世の九月さへおもひしれとや志ら治

百首の哥よみ給ける時月の哥とてよみ給ける

右衛門督頼実

常よりも身にそしみける袖の上に月やとすらむ萩の上せ

海邊月といふことをよめる

俊恵法師

なにあやはらふのそこそあらはるるあしのおちはにやとる月影

賀茂社の後番の哥合とて神主重保かよま
せ侍ける時よめる

権中納言長方

やすらひ濱のまにこそおなしく玉まくらしつゝ秋のよの月

菅原在時卿下

草まくらくらし川の音にて月やむすふねかつる夢かな

湖上月といふこゝろをよめる

藤原雅家朝臣

月影はさしぬとみえなから波にすゝむ志かのうらなみ

月前虫といふこゝろをよめる

頼円法師

照月の影はえまさる浅茅原露の下にも虫は鳴けり

月照草花といふこゝろをよめる

藤原親盛

あさち原葉末に結ふ露毎に光をわけてやとる月影

題しらす

菅原清輔朝臣

故郷にたれわかよに住そ絶なるらん月はみるもそえ

刑部卿頼輔

身にしみの秋はうらみて捨ゆくは涙くもりて月はみえまし

むしにさえきさふ

大かたの秋のあはれと思やる月まんはかくまれなると

前大納言成通

名にひあるなかしとそ思ふ姫のよの月を詠てゆらしるの

法性寺入道前太政大臣の家にて洞庭月と
いふこゝろをよみ侍ける
源俊頼朝臣
てる月のたひねのとこやしもとゆふかつらき山の
たに川の水

千載和歌集巻第五

秋哥下

題不知　大貮三位
はるかなるもろこしまてもゆく物は秋のねさめの心なりけり

堀川院の御時百首の哥たてまつりける時
よめる　藤原仲実朝臣
山里はさひしかりけり木枯のふくゆふくれのひくらしの声

崇徳院に百首の哥たてまつりける時秋の
哥とてよめる　藤原季通朝臣
旅の宿は松をとふかぬ風の音もさひしさしれねとふそきやは

法性寺入道前のおほきおほいまうち君内大臣に
侍りける時の家の歌合に野風といふ心をよみ侍る

藤原時昌

露はむすほれてゆく秋のゆふくれあはれ風の音

兼暦二年内裏の歌合によみ侍る

藤原正家朝臣

夕されは野への荻原吹く風にほのかにもなひく薄なるなり

堀河院の御時百首の哥たてまつりける時
よめる

二條太皇太后宮肥後

みむろ山おろす嵐のさひしさに妻よふ鹿の声たくふ也

大納言公実

さゆくふたやまつさえしに妻こふ鹿の声きこゆらむか
あはしらす

輔仁のみこ

秋の夜は遠山おろしの庵にあけはてにしく成れ
たちのほれ山ふかくこゆるなくとをきてよみ
侍ける

源俊頼朝臣

ほとゝきす鳴ねは雲へよそにしゆきとも波こそはことに有
けれ

百首の哥たてまつりける時よめる

待賢門院堀河

さらぬたに夕さひしき山里の霧の籬に牡鹿なくなり

夜泊鹿といへることをよめる

刑部卿範兼

みなと川うきねのとこにきこゆ也生田のおくのさをしかの聲

藤原清輔朝臣

うきねするゐなのみなとにきこゆ也鹿のねおろす峯の松風

俊恵法師

夜をこめて明石のせとを漕出れははるかにおくるさをしかの聲

道因法師

これと川秋舟漕出る追風に鹿の聲さへせとわたるなり

鹿声両方といへることをよめる

覚延法師

宮城野のこ萩か原をゆく程は鹿のねをさへわけてきくかな

鹿乃哥とて読る　左京大夫脩範

はゝそはら妻こふる忍をいかならん重やゆふまくれてはてゝ見

右京大夫季能

山さとにはしくるゝ袖のあはれにも鹿乃聲する露やおくらん

法印慈円

山里の暁かたの鹿乃ねは夜半のあはれのかきりなりけり

俊恵法師

よそにてもかなしむ暮の鹿乃音をいかなる妻かつれなかるらん

道因法師

ゆふまくれさてもや虫は通ふらん庭の蓬のしけみならねや

賀茂政平

常よりも秋の夕をまつと見れは鐘やとひけん

惟宗広言

ほのさはなかにあさくれて鳴深山のさと

長覚法師

いかはかり露けかるらんさをしかの妻恋わたる萩の葉末

寂蓮法し

杉のへより門田にかよふ秋風よいかなる露を契らん

題しらす　　よみ人不知

おもふことなき秋のたに小山田は仮庵の床もさひしかりけれ

源兼昌

我か門のおしねかりてのちよりそ門田に鴫の立をもしる

寂蓮法師

虫の音は浅茅か本に埋もれて秋は末葉の色にそ見ゆる

藤原兼宗朝臣

秋の夜の長きを知るも我ひとり長き夜をしも鳴く虫の声

虫声非一といふことをよみ侍りける

左近中将良経

はまくなおさらか来れ虫のねを哀ひしらぬにてそ過つゝ

百草乃花たてまつりける時よみ侍りける

大炊御門右大臣

よもすから聲よわりゆく虫のねに秋乃暮ぬる程をしるかな

きりきりすちかくなきけるをよませ給ひけれは

花山院御製

秌ふかく成にけらしな蛬ゆかのあたりに声きこゆなり

保延のころをひ身をうらむる百首乃うた

よみける時虫のうたとてよめる

皇太后宮大夫俊成

さりともとおもふ心も虫乃ねもよわりはてぬる秋の暮哉

題しらす

仁和寺道性法親王

虫の音もまれになりゆくあたし野にひとり秋なる月の影哉

式子内親王

草も木も秋の末葉はみえゆくに月こそ色もかはらさりけれ

後冷泉院乃御時九月十三夜月宴侍りける

によみ侍りける

太政大臣

すむ水にさやけき影のうつれはやこよひの月乃名になかるらん

十三夜乃こゝろをよめる

よみひとしらす

秋の月千々に心をくたききてこよひ一聲よあへ山ともなき

月前擣衣といふ心を

仁和寺後入道法親王覚性

さ夜ふけて砧の音そたゆむなる月をみつゝや衣うつらん

堀河院乃御時百首哥奉りける時

擣衣のこゝろをよみ侍ける

大納言公実

急けやとをちららん唐衣さあらき霜の空に響きて

源俊頼朝臣

松風の音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川の里

藤原基俊

誰かためにいかにうてはか唐衣千たひやちたひ声の恨

旅宿擣衣といふ心をよめる

俊恵法師

衣うつおときくにそしられぬる里遠からぬ草枕とは

寄衣とてよめる　法橋宗受

夕霧や妹のあ里とこそあつらん袖よ露乃おきそふ

暮鶉草花といふ心をよませ給ける

崇徳院御製

妹ふさゝあそて逢河乃夜なき雨句にはなのうへちうそそれ

百首乃哥たてまつりける時よめる

前参議親隆

いろかへて霜をもみえぬ夕暮にうつせる残おちてきえなん

法性寺入道前太政大臣内大臣よ侍りける時

家の哥合に残菊をよめる

藤原基俊

けさみれは夜はかりし霜をゝきてこそうつろひゆく白菊の花

月照菊花といへる心をよみ侍りける

内大臣

白菊乃葉におく露にやとらすは花とそ見まし照る月の影

籬菊如雪といへる心をよみ侍りける

前大僧正覚忠

雪ならは籬にのみはつもらしと思ひとくにそしらきくの花

菊乃哥とて侍る

祐盛法師

錦かく籬のきくのいろかへは露乃いろさへうつりゆく哉

百首の哥よみ侍りける時菊の哥とて侍る

藤原家隆

陽え海の光を霜にまかへてや月にうつろふ白菊の花

崇徳院に百首の哥たてまつりける時菊の哥とてよめる

藤原季通朝臣

とくふ道のちきりむすへしそ秋のくれとよまれ

瞻西上人雲居寺にて結縁経の後宴に
歌合し侍りけるに野風のこゝろをよめる

藤原基俊

秋よあへてはらふとも見えつゝあらしの風のすゑや

紅葉のちるをよみ侍りける

仁和寺後入道法親王 覚性

初時雨ふる程もなくしりてゆふつくさ山は色つきにけり

覚延法師

むら雲乃時雨てそむる紅葉ハ落くこそ色をみえけれ

秋の歌とてよめる 藤原定家

志くれゆく四方の梢の色よりも秋ハ夕のかはるなりけり

題不知 道命法師

あさほらけの霧やへのはらんをくれ山を照せ紅葉な

宇治前太政大臣紅葉乃歌侍りけるによめる

小弁

君みむとやしきらん立田姫りみちれ錦色をそへけり

紅葉留客といへる心をよめる

素覚法師

旅てふるさと人ハ紅葉ちりなむ後をまてとそ

歌合し侍りける時紅葉乃歌とてよめる
左京大夫顕輔
山姫乃ちへ乃錦をたむけてもちるもみち葉をいかてとゝめん
月照紅葉といへる心ををのこともつかうまつりける時よませ給ける
院御製
もみち葉に月の光をさしそへてこれやあかちの錦なるらん
承安二年法住寺殿の殿上乃歌合に
関路落葉といへる心をよみ侍ける
右のおほいまうちきみ
山風にたえすひまなく紅葉哉いつくも関戸乃雲る
大納言實房
清見かた関にとまらて行舟は嵐のさそふ木葉成けり
権中納言実宗
もみち葉を関もる神に手向おきて逢坂山をこゆる木枯し
左大弁親宗 参議
紅葉乃みな紅に散しけは名のみなりけり白川の関
従三位頼政
都にはまた青葉にて見しかとも紅葉ちりしく白河の関
湖上落葉といへる心をよめる

刑部卿範兼

ちゝ浪やをちくるねの山おろし紅葉を浪乃柵となしつゝ

百首乃哥奉りける時よめる

藤原清輔朝臣

龍田山梢のむらもみちちりかゝりせはそてのころもみちなまし

そしいらす

覚盛法師

秋といへはいそゝれなるの梢の時雨をもまつ紅葉しにけり

近衛院乃御時禁庭落葉といふ心を読る

藤原公重朝臣

庭の面に落てつもれる紅葉は九重なから錦なりけり

大井川もみち見にまかりてよめる

俊恵法師

岩ふれは嵐の山は大井川紅葉吹おろす浪にそ有ける

道因法師

大井川なかれておつる紅葉かなさそふは峰の嵐乃みかは

百首乃哥乃中に紅葉をよめる

藤原清輔朝臣

いまそしる手向の山はもみちはのぬさとちりける名にこそ有けれ

落葉乃心を読る

祝部成仲

立田山林葉のさそひはさけしとも嵐乃行て小紅葉をそみる

賀茂成保

吹ころそ秋とみえしせはいろなき風も紅葉なりけり

松間落葉といふことをよめる

藤原朝仲

冬の夜は松ふく風の音にてちるはそれともみちなかりけり

庭落葉といふ心をよめる

惟宗廣言

庭の面は木葉にうつむかた雲もみえすなりにけり

よみ人しらす

法橋慈弁

散つもる木の葉の風にはらはれて庭にも跡のみえぬなりけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

源俊頼朝臣

秋の田に紅葉ちりける山里をこともおろかにおもひけるかな

百首の歌よませ侍ける時紅葉の歌とてよみ侍る

摂政前太政大臣

あらし吹峯の小川の色ふかきは木葉やみなかみのあらん

落葉浮水といふことをよみ侍ける

後三条内大臣

暮て行秋のとまりやさそふらん紅葉なかるゝ山河のせき

百首の歌めしける時九月盡の心をよませ

給ひける　崇徳院御製

紅葉のちりゆくかたを尋ぬれは秋もあらしの声のみそする

山寺秋暮といへる心をよみ侍りける

前大僧正覚忠

行ぬる秋に心をそへさそと山里の鐘さへの暮を送る也

雲居寺の結縁経の後宴に歌合し侍りけるに九月尽の心をよみ侍りける

瞻西上人

くゝにこねさにあちりてゆく秋を尋ねやまたかの山ちなん

源俊頼朝臣

あきぬとも紅葉は風にさそはれてまそ人の峯をにとなりまち

承暦二年内裏の歌合に紅葉をよめる

前中納言匡房

立田山ちる紅葉はをきてみれは秋はふもとにかへるなりけり

百首哥めしてまつりける時九月尽の心を
よめる

花園左大臣家小大進

こゝろひまて情はいかにさきりもとさそめける行代をは

行ふらしめきゝける

千載和歌集巻第六

冬歌

堀河院の御時百首の歌たてまつりけるとき
初冬の心をよみ侍りける　大納言公実
時しもあれ冬は公達らのまにいは雨の名残落こそなるらん
源俊頼朝臣
いつかりし秋の名残をおしむまにけさは木の葉に嵐ふくなり
藤原仲実朝臣
いはそゝく川なみさえの梅しつまに志はまのおもから冬そしらるゝ
百首の歌めしける時初冬の心をよませ給
ける
崇徳院御製
もみちはゝちりはて葉に小倉山まて庭に尽きぬ冬を見せける
大炊御門右大臣
はまくの草葉も今は霜かれて野へより冬や立てきぬらん
大納言隆季
とゝむへき道とは誰かいはすそ冬はしくれてもしらぬ
前参議教長
秋のうちはあはれしらせし風の音のはけしさそふる冬はきにけり
花園左大臣家小大進
よなりこゝらはのよそなるにしくれそ冬は立かくれ

山家初冬といふ心をよめる

藤原孝善

よのまにハきゞのこのはもちりぬらんはけしき嵐の音よはるなり

題しらず

和泉式部

外山吹嵐の風の音きけハまたきに冬のおくそしらるゝ

百首の歌たてまつりける時初冬のこゝろを
よみ侍ける

大炊御門右大臣

初霜やをきはしむらん暁のかねのをとこそさえきこゆなれ

堀河院の御時百首の歌たてまつりけるとき
よめる

前中納言匡房

高砂のをのへの鐘のをとすなり暁かけて霜やをくらん

藤原基俊

楸おふる小野のあさちにをく霜のしろきをみれハ夜やふけぬらん

冬のはしめの歌とてよめる

藤原定家

冬きてハ一夜二よを玉篠の葉分の霜のところせきまて

題しらず

藤原基俊

霜さえてかれゆく小野の岡へなるならのひろ葉に時雨ふるなり

馬内侍

移光して雉かなくらんは浅茅の葉よりいかなる時雨と

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるとき
家の哥合に時雨をよめる
源定信 法名道寂
をとにさへ袂をぬらす時雨かなまきの板屋のよはのねさめに
崇徳院に百首哥奉りける時落葉の哥
とてよめる
皇太后宮大夫俊成
まはらなる槙の板屋に音はしてもらぬ時雨や木葉なるらん
しくれのこゝろをよみ侍ける
仁和寺後入道法親王 覚性
木葉ちるとまりきてや宿りして時雨は出ありせハ

暁更時雨といへる心をよみ侍ける
摂政右大臣
独ねの涙やそらにかよふらん時雨にくもる在明のつき
藤原隆信朝臣
さゝ紛ハ落やうてふかみふらんさあても出時雨そさく
しくれの哥とてよめる
従三位頼政
山めくる雲はしたにや成ぬらんすその原にしくれ過なり
源師光
しくれゆくかたちのとふ山につきもあや雲にかくれん

道因法師

嵐ふくひらの高ねのねわたしにあはれしくるゝ神な月かな

堀河院御時百首哥たてまつりける時の

志くれのうた

中納言国信

深山への志くれてわたる数毎にかことかましき玉さゝの声

源俊頼朝臣

木葉のちりくるおとは時雨する浪もまかへぬ物にそありける

二条太皇太后宮肥後

ゆかりなく人も問ぬ山里ハしくれかゝりそ色そへにける

因位法師人〻にすゝめて百首哥よませ

侍けるとき志くれのこゝろをよめる

藤原定家

時雨つるまやの軒はのほとなきにやかてさしいる月のかけかな

よみ人しらす

玉つさに浪のうはんちりて志くるゝ空にちりみなくなる

山家時雨といふ心をよめる

源なりより

見ゝのこにむら志くれてつゝひき薪てやそ軒はに時雨さるらむ

是しらと　紀康宗

暁の寝さめにきく時雨こそありても人の袖ぬらしけれ

落葉のこゝろをよめる　藤原盛雅

落そめは風をいとふか紅葉をもかさねたる山嵐そと

中納言定頼世をのかれて後山さとに侍りけるによみてつかはし侍ける　中納言定頼母

都にはひさしきまゝの木枯に峯の松かせといひそめつる

宇治にまかりて侍けるときによめる　中納言定頼

網代木にかけたる川霧たえ／＼に[illegible]せの網代木
[illegible]河の[illegible]のふち百そ[illegible]てまつりけるとき

鷹狩をよめる　藤原仲実朝臣

やかたをのましろの鷹をひきすゑてうたのとたちをかりくらしつる

隆源法師

みかりのにかりくもみえぬ鷹の尾の[illegible]

源俊頼朝臣

夕まくれ山かたつきて立鳥の羽音に鷹をあはせつるかな

傅大納言道綱家の歌合に千鳥をよめる　藤原長能

いとゝしくはるゝの河霧をわけもせてさ夜のあかつき千鳥鳴也

千鳥をよめる　皇太后宮大夫俊成

浦ちの霙在明乃空に鳴千鳥かくて月ハかなしとやなく
道因法師

岩こゆるあら磯波に立千鳥心ならすや浦つたふらん
法印静賢

霜はえてさよもふけ井のかはかせもこほりやくれや千鳥鳴らん
賀茂成保

しもかれのなにはのあしわけのくとゆるみなとに千鳥鳴也
水鳥をよめる
源親房

うきねするやうき世の霜をそはらふ友なきをしの夜はのはねかせ
題しらす
紫式部

水鳥を水のうへとやよそにみむ我もうきたる世をすくしつゝ
堀河院乃御時百首歌奉りける時よめる
前中納言匡房

水鳥の玉藻のとこのうき枕ふかき思ひハたれかまさらむ
百首乃哥めしけるときよませ給ひける
崇徳院御製

さはのかものうきねをそいく夜かさねけの霜よそはらふ
左京大夫顕輔

難波江のあしまにやとる月みれはわか身ひとつもしつまさりけり
お始結といふことをよめる

権中納言経房

なく鳥のうきねのとこやあれぬらんつらゝかゝりてのこりゐるかな

水とりをとてよめる

道因法師

鴨のゐる入江のあしは霜枯ておのれのみこそまさりけれ

賀茂重保

おく霜をはらひかねてや志かもふすまの下にかれなん

月前の鳥といふ心をよめる

前左衛門督公光

かもめゐる入江の月はおそ波のねよそてふ

冬月といふことをよめる

平実重

よとゝもにむすふおれてくまはへふくもすめる月かな

こほりのことゝそよめる

左大弁親宗

いけ水の月は光をとゝむらんやとしみえともおもかけそする

藤原成家朝臣

冬されはゆてふ人はこほりとをおもそむすふ山のねかな

道因法師

月のすむ空には雲もなかりけり[illegible]うつりし水はおもてつゝ

百首歌めしける時あられのうたとてよませさ
せ給ける
崇徳院御製
はらてかそ見んろきりけのこゝろかはとにいまや玉川の水
皇太后宮大夫俊成
月さゆるこほりのうへにあられふりこゝろくたくる玉川乃里
閑居霰といへる心をよみ侍ける
左近中将良経
ほのゝ秋乃ちりの梢にひとりねてなれてけふ霰ふる也
山家霰といへる心をよみ侍ける
大納言経信
あさしめてみるそさひしきゝりの葉の色をまさりける
百首歌の中に雪の歌とてよませ給ける
崇徳院御製
秋ともみて岩のかけそに風さむみそてそさえまさりける
藤原季通朝臣
はえ渡るよるの霜しきにみえしへの雲ゐさしてそこにふるかな
藤原清輔朝臣
消ぬへきや我の人はしもみえけさ山さとにそらふる雪
雪乃歌とてよめる
藤原資隆朝臣
霜枯の籬乃うちの雪みれは菊よりのちの花もありけり

題しらす

仁和寺法入道法親王 覚性

あさへてもいはむらこほる月影よりうすく雲かけてふもとの白雪

前参議教長

深山にはけさちる雪にうつもれていそくこの夜のあとやたえなん

京極前太政大臣の高陽院乃家にて歌合に雪

のうたとてよみ侍ける

治部卿通俊

さゆるまて山の白雪つもれともさらにさとなる高ねなりけり

藤原顕綱朝臣

外山なる柴の下葉もちりはてゝをちの高根に雪ふりにけり

源俊頼朝臣

雪ふれは谷のかけはしうつもれて梢そ冬の山路なりける

うへのをのことも百首の歌たてまつりける

時雪の歌とてよませ給ける

二條院御製

雪つもる嶺にふゝきや渡るらん越のみそらにまよふ白雲

遍昭寺にて池上雪といへる心をよみ侍

ける

仁和寺二品法親王 守覚

波かけはみきはの雪もきえなまし心ありてもこほる池かな

雪乃歌とてよみ侍ける

右のおほいまうちきみ

山さとは垣ねは雪ふかくつもりて野へとひとつになりにけるかな

右近大将實房

跡もなきしをりも雪にうもれ行くゆきの山ちふましかなかな

従三位頼政

越えていまそこふら小野の山雪ふかみ村のあるしそみえれ

顕昭法師

なこの海よりみし雪そふりける松浦嶋

摂政右大臣に侍ける時百首歌よませ侍けるに

時雪の歌とて

藤原良清

ゆきさゆるならの山とみゆる世はいかのへとこゆるしかの浦

醍醐の清瀧の社にて歌合し侍ける時よめる

よみ人しらす

峯の雪にわけし行とかつもりて友こそなけれ深山の山さと

行路雪といへる心をよめる

西住法師

駒の跡はかつふる雪にうつもれておくるゝ人やみちまよふらん

題しらす

坂上明兼

里行乃おまて[illegible]あかりせは我ならて雪をといそまし

雪の歌とてよめる

藤原為季

志業蓮子のかそへて峰くと雪の歳ふけるかな

俊恵法師

雪ふれハ木ことの梢に咲そむる枝よりかの花もちりけり

開路雪満といふことをよみ侍ける

内大臣

ゆきつもるにあとも絶ぬる道ハ鈴鹿山雪こそ関のとさしなりけり

としふりたる桜の花のさかりなるを見てよみ侍

天台座主明快

山里の垣ねの桜ハ咲にけりちりなんのちハ惜しもやらめ

雪中歳暮といふ心をよみ侍る

前大納言実長

かきくらしちるをみれはふる雪にいそく年のみくれゆくらん

こもりゐて侍けるとしのくれによみ侍る

前左衛門督公光

ゆきとゝもにふけさくて過にける年をこよひに暮そ みゆり

としのくれの心をよめる

[illegible]

あはれにも暮ゆく年の日数かなかへらんとハ我のまとふ

歳暮述懐のこゝろをよめる

惟宗広言

数ならぬ身につもりぬる年なれハ老ふの暮そとかなしけるさらまし

源光行

おしなへて菊ても秋の色の思ふむかしにかはらぬ
としのくれの歌とてよみ侍ける

法律師俊宗

一とせハたゝあさき夢のうちにして暮ぬるをおしむなりけり
うちおほえてはなほはかなきにとりつゝおもて侍る

よ閑中歳暮といふことを人々よみ侍
けるに続侍ける

民部卿親範

さやこふくをくりむかふといそきしとしをへてや
としのくれはつくるなりけん

千載和歌集巻第七

離別歌

宇佐の使の餞しけるところにてよみ侍る

藤原實方朝臣

昔みし心はかりをしるへにておもひそおくるいきの松原

有國大貳になりてくたり侍りける時よみ侍る

前大納言公任

わかれちはさりて行さき命にて君にあひみむとそ思ふ

とをき所へまかりける人のまうてきて暁

かへりけるに九月つくる日むしのねもあはれなりけれはよめる

紫式部

なきよわる籬の虫もとめかたき秋の別れやかなしかるらん

堀河院の御時百首の歌たてまつりける時別のこゝろをよみ侍りける

大納言公実

めくりこむ程をもさためぬ別ちは数のてふりを思ひ出にせよ

前中納言匡房

行末を待へき身こそ老ぬれは別はみちのとをきのみかは

源俊頼朝臣

忘るなよかへる山ちに跡たえて日数は雪の降つもるとも

陸奥にいそち侍りける時よろつれの帰りまうて

くたる人のとひ給けれハよめる

大僧正行意

ゆきこむ程とハいへとも定めなき身ハ人たのめなる

百首歌奉りける時別の心をよめる

左京大夫顕輔

たのむまてとしかりてゆきこハ花そやそての別なるさ

上西門院兵衛

限あれハこそゆくめ世をそわかれしとはいはさりきと

参議資通大貳にてそのかりけるに筑前守にて侍りける時つかはしける

藤原經衡

行末をとゝめかたくおもふにも我も悲しき都なりけり

返し

大宰大貳資通

年経ぬる人の心をとひやま君ある海にこそかへりけれ

暁行はなそく年聖にまして侍る時人につかはしける

道命法師

契ともに中人をかれ別ちに泣りそとまりさとけれ

人の法会なとこそひける導師に越前国よりまかりてのほりかへり侍りのちにいはれ歌のまかおくれ

しみけるによめる

天台座主源心

なかくへのおもふさ身と思ひをこそハ忘るなとこそえてそ契れ

つくしにまかりけるに京よりかへさるとて
ことそれともなきを女の許よりおくりさらち
おもひせなくそりけるをつかはしける
よみ人しらす
をしむ人はわかれをしのへはかりのよのは
さらましけれとこれをさりともゆくとい
ふおもひふとひて侍りけるにつかはしける
和泉式部
わかれても遠きよりはいとゝみなれものを
成尋法師入唐し侍る時よみ侍りける
成尋法師母
もろともにこれかたちとしふかくしも大空に浪にまかせて
百とせのよの侍りける時よみける
僧都覚雅
いとゝもにてもおもひやれ思ひとむかしの旅の
夏ころあしわかくし侍りける人の旅にて
のちまてもあはれとおもひしなるまて
のかり侍りてこゝろよりけるはつかはしける
西住法師
まてしはしひとつの遠き妹をもろともにはるかに山ちかく
さ

源惟盛といひし侍りのふるく箏ねとおもへなし
へ侍けるを土佐国にはなたれける時かしこにて
なくなりにまかりてさうりけるに青海波の秘
曲のことちかふることなきをなげき侍てそれよし
の譜をさへたまふとてかくなんかきつけて侍
ける

入道前太政大臣師長

なかしへくことをとふくきみのなき身はおもと海の波によるまなし

人に餞し侍りけるあかつきよみ侍ける

右衛門督頼實

忘るなよをはすて山の月みても心ことなるありあけの空

百首歌よみ侍ける時よみしわかれの心をよめる

藤原定家

わかれても心へたつな旅衣いくへかさなる山ちなりとも

王昭君の心をよみ侍ける

右大臣

あろすのゝ咸行旅の別路よて宿しよのねそ

から孫

千載和歌集巻第八

羇旅歌

題不知　　在原業平朝臣

左前乃月を志のふや小やまもりこゝろひとに見えあふさかの実

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時関路月といへる心をよみ侍りける

中納言師俊

ゐるまちや深山の雲の梢に見し月の夜とそやまかぬらん

月前旅宿といへる心をよめる

藤原基俊

あたら夜を伊勢の浜荻折しきていもこひしらに見つる月哉

堀河院御時百首歌奉りける時旅の心をよめる

中納言国信

波の上に左前乃月をみましやは左海の雲や小屋となりせは

旅路初雁といへる心をよみ侍りける

八条前太政おほいまうち君

よなよなの旅ねのとこの風さえて初雁かねをききそめ山

うみ人の流しの小舟なかしあひてよみ侍りける

和泉式部

みな人をうらさねともてそとひおこすれは秋も鳴まて

丹後国に侍りける時よめる

赤染衛門

おもふことなくてそみましよさの海あまの橋立都なりせハ

陸のくにゝまかりくたりけるに

ことありてあつさの山をよみ侍りける

能因法師

宮木ひくあつさの杣をかきわけてなにはの浦をとをさかりぬる

おなしくのくにゝ住てのほらんとしけるを

大貳さこすゝのまうしとてとゝめけれハ

よめる

津守有基

住のえにまつらんとおもひけるさへなけきしにまさるとふかな

天仁元年斎宮群行のともにわすれ井といふ

ところにて読る

斎宮甲斐

わかれゆく都のかたのこひしきにいさむすひみんわすれ井の水

法性寺入道関白の時の歌合に旅宿の月と云

心をよめる

源雅光

さ夜ふかき雲井に鶴もなくなるは独やは旅の空なる

百首の歌めしける時旅の歌とてよませ給

うける

崇徳院御製

なく衣袖の涙にやとる月も旅ねのこゝちこそすれ

松山の梢をなかにゆくかひなん玉のゆくへそつゆのことく

大炊御門右大臣

花咲し野への草木も霜かれてそこはかとなき猿の声

藤原季通朝臣

ゆふしあやかたの捨山に月見ると我をしらん

待賢門院堀河

みちとせの心もそらになかめやる家この山の雲をみれはか

同院安藝

ゆふの葉をとりて露かゝる枕は玉ちるこの草枕か

皇太后宮大夫俊成

ぬれつゝ磯のとまやの梶枕こともなくなくなきよなよな
よとまそそのちはかゝし待たつ小浦路て
月をこそよめ

西住法師

和田の原あちの小浪をへそてそまつ出る月をみるかな
宮野まちてけつみちのくによ待なる

高野法親王 覚法

さらぬたに深き世の中しるらむなとはかくて猿の声きけはそれ
しりつけのくにて由かりける時になりにけるかな
なかみともふかそよるに待たる

前中納言師仲

おほかたはふなり月みそてなるらん時来りしらぬ様のあさ

あつまのはてにゆかりきる時ゆくはさつらん枕

え侍けれは　左京大夫脩範

日をへつゝゆくにはるけきさかなれは末を都と思はましかは

海邊羇旅といへる心をよみ侍ける

よみ人しらす

くもてはきぬかしゝと思ふともいそね枕には

枕にはりゑにこそおもひつゝおりて思ひ侍けるは

人のもとよりやまのたちまちあかつきにこそ侍

けるはつかはしける　道因法師

月みれはまつ都こそ恋しけれ待らんと思ふ人はなけれと

よるあふ旅の空をすくとてよめる

祝部成仲

相坂の関にて人をおくりまかりけるに侍のおりにまうてく

中院の右大臣の家にて独行閑路といふ

心をよみ侍ける　大納言定房

越て行友やなからん相坂のせきの志みつに影をやとさん

羇旅露といへる心をよみ侍ける

前大僧正覚忠

旅衣あさたつをのゝ露志けみしほりもあへすぬれにけるかな

依りし此度しるの歌合とて人々よみ侍りける
旅宿時雨といふこゝろをよみ侍りける
右近大将實房
風のおとにさそはれて（まほ）松の枕にふりぬる時雨哉世ハ
俊恵法師
りか草志きの浦のね覚にハ時雨よのまや袖ハぬれける
源仲綱
玉もふく旅やかたてくふりくる時雨旅ねの袖もしほりなしや
太皇太后宮小侍従
草枕おなし旅ねの袖にまたよハ此時雨も宿ハかるまし

家に百首歌よませ侍りける時旅の歌とて
よみ侍りける　摂政前太政大臣
あらくとも渡れる此奥を漕ゆけハ峯の松せを過
刑部卿頼輔
こゝの原志らぬちかくのなかるらん世ハ雲と浪とにひとりかへり
皇太后宮大夫俊成
あまのすむ磯の浦のいかりの露を袖にほしあへて
旅宿のこゝろをよみ侍りける
仁和寺二品法親王　守覚
よしゆくハ旅のとまりや小旅ねせん波きほひてぬる袖かハ

たひの哥とてよみ侍ける

法印慈円

旅の世にまた旅寝して草枕夢のうちにも夢をみるかな

大納言隆房

草枕たひねの夢にいくたひか別し都にゆきかへるらん

関路暁月といへる心をよめる

法眼慈覚

いつもかく在明乃月の明かたは物やかなしき須磨乃関守

百首の哥よみ侍ける時たひの哥とてよめる

藤原家隆

たひねする須磨の浦ちのさよ千鳥声こそ袖の波はこえけれ

修行に出ありきけるに小野中に宿りて侍ける夜旅の枕つかたしきりにきこえけれは

よめる

慈雲法師

かくしつゝおふとも海人の蓬生のよひしらて夢まても

たひの哥とてよめる

権律師覚弁

旅ねするこの下露乃袖にまた時雨ふるなりさやの中山

摂政太政大臣の家に哥合に旅乃哥とて

よめる

藤原資忠

旅ねする庵りをすくるむら雨の名残まてこそ袖はぬれけれ

たひのこゝろをよめる

大中臣親守

霰りつ節は草屋に旅ねして夜ともえこそねさりけれ

人のかゝることありて忘れぬ人に待けれ時

よめる

平康頼 法名性照

くはうらう月の稀とも忘れて稀なるきは都なりとまり

さつまかたおきの小島に我ありと親には告よやへの塩風

羇中歳暮といへる心をよめる

僧都印性

東路と年もこえぬるや成ぬらん雪降にけり白河の関

象位法師よませ侍ける百首の歌の中に

たひのこゝろをよめる

寂蓮法師

岩ねふみ峯の椎柴折しきて雲にやとかる夕くれのそら

千載和歌集巻第九

哀傷歌

花の盛に藤原為頼なとゝもにいはくらにまかりけるを中将宣方朝臣なとかくと
給はらまさむのちにおもひふかゝりけれは給人を
中えんゝゝとられとし中将も為頼も身まかり
にける又のとしかの花を見て前大納言公任
許につかはしける

中務卿具平のみこ

此歌詞花に赤染衛門トアリ

春くれはちりにし花もさきにけりあはれわかれのかゝらましかは

返し

前大納言公任

ゆきかへり春や哀とおもふらん契りし人のまたもあはねは

ぬしなき家の花を見てよみ侍ける

藤原範永朝臣

植をきし人のかたみとみねはまた宿の桜を誰か折まし

弾正尹為尊みこにおくれて歎てよめる

和泉式部

ねさめてはきゝにさくる春秋てこの比は梢そあれ下
まつひ待けるにてよみてなりふけるいる
あかくてにらあらきさん山吹あかさねをあき
てそのなんあふつかはしける

藤原道信朝臣

くらゐ乃そのや秋月入ふきん見とも見ともいそやあら
又いつく月なりて後女の家よみて
くもみ侍けりとも

中将道信朝臣身まかりにけるなかて
てのあしたに侍る　藤原頼孝

あひみしも乃光をなかむるよもしくれとみゆる雲ゐをそなし
世乃なかなれしとよみ世侍けり

花山院御製

ふたとせも家なしもえそてまれそはいつまて見むといつまてとらせん

一条院かくれさせおはしまして又のとしかの院の
花をこそよめる　源道済

桜花にほひも中々にとしの雲ゐはすそ[illegible]ま
こゝろしてまけ人月なりふけるにあわ

道命法師

なくなくとこえしとおもひぬ秋月に独やたちぬみちをたらん
花山院くまし侍を侍して乃ちにのとも侍けり

藤原長能

あひにし命乃あまりなりして君まことひ引あまり那
後一条院くれさせあまりてれしかくこそす

のかれけるによませたまひける
上東門院
一とせを君にまかせむ時なこの五月菖ハやねにまかせて
まことの皇太后宮とハひたまひけるとなむ
とゝくおほえんとてかつにまいらせ給へりけるを
くれ給てのち陽明門院一品内親王と申ける
ひさしのみにおはりまゐりきこえにふかき御帳の
内に菖蒲くさを玉なとぬきまとはさせ給たると
見てよみ侍ける　弁乃めのと
あやめ草涙の玉にぬきかへてをりならぬねを猶そなきける

返し　江侍従
玉ぬきしあやめの草ハありなから淀野ハあれんものとやハみし
大納言長家大納言のむすめにすみ侍りけるを女身まかりにけるころ法住寺にこもりゐて侍りけるにつかはしける
大弐三位
かなしさをかつハおもひもなくさめよ誰もつゐにハとまるへき世か
返し　大納言長家
誰もみなとまるへきにハあらねとも後るゝ程ハ猶そかなしき
一条院かくれさせ給ひにけるとしの秋月をみて

よみ侍ける　　　兼香殿女御

たくふれやきゝぬる月影は涙くもりてみえぬよなりや

後一条院四月よりくれさせ給ひにたりしに九

月に中宮又うせ給ひにけり同十九日の

七忌にこもりて上東門院にわたりて世の

けふ日人くまれ侍しことをおもふによみ侍ける

小弁命婦

あかさりし君を桐のおもかけはわすれぬものゝかなしきをかり

おなしとし後朱雀院御禊大嘗会なとすきて

十二月つこもりに大納言長家二条院の一品

内親王にやけける時まいりて侍けるによみ侍ける

前中宮宣旨

くれはてのとしすゑにつもりしかなしきはかりあらぬよ

返し　　大納言長家

あかさりしとそまちける別にはこゝろもとゝなをくとゝなく

ことしきりのまよゆきふけし人のなくなりにしを

おもひつゝあかすとやことしのくれてゆきさる

ひとゝふにつけて悲し　むつかしれこひしき

ちりぬ雲隠[隠イ]しとしへは聞ましをおもひしらぬと

恒徳公かくれ侍てのちゝふみ侍るかみ

のりみくなるに侍けるをとこてよみ侍ける

藤原道信朝臣

年を経て君をのみこそますかゞみ見し影にもあらぬ身にや

上東門院にまゐりて侍けるに一条院の御事などおぼしいでたる御けしきなりければよめる

赤染衛門

つねよりもまたぬれそひし袂かなむかしをかけておちし涙に

返し

上東門院

うつゝとも思ひわかれで過ぐるまに見し世の夢をなにかたりけん

あさくに侍りけるに京なるをとこのもとに月頃

ねざめていひつかはし侍りけるみちのくに

よめる

源実基朝臣

歎くとも思ふはつきて過ぎにしを今はこれをまれなん

こゝろに侍りける時おやの思ひになりにける秋

らんかなのことも侍りける野に花見にまかりとて

てつかはしける

平雅康

もろともに春のはなをもみし物を人にをくれて見るぞかなしき

右衛門督基忠にをくれ侍りてのち故家にまかり

たりける

前中納言匡房

花ちらせみし人は籬なくちりにけり秋月をも風をも待とはつかむ

後三条院かくれさせ給ひて諒闇のはじめつかた

藤原顕経朝臣

かくしもなき墨染の袂かなはかなにと殿上人あまた
おなじく侍りける時大納言さくらまで侍りに
けるのち中納言国信中納言に侍りける時五月
五日消息して侍りけるついでにつかはしける

権中納言俊忠

墨染の袂よりかねとこれはあやめもしらぬ涙なりけり

返し

中納言国信

あやめ草うきねとこそは涙のかかるらん袖をといひそなれ

かんなにさそはれてなげき侍りける比肥後が
許よりとひて侍りけるにつかはしける

藤原基俊

とひやまとむすびし床をうちはらひ昔をしのぶ袖ぞ露けき

贈皇后苡子かくれ侍りにけるのちさとにまかりて
のちのことなどいひてめ侍りけるにかのあたり
つきてかたみに侍りけるを

むかしみしふるさとをあれはてゝそ螢ならんしるしなき
おひしげりけるかんなにかまゐりける時月を
みてよめる

藤原有信朝臣

くもゐとも小島の月をみしのそらいかなるやみに思出でなん

人のわざしける導師にて諷誦文よみける

よろこび給りけれはよろこび給りける

慶範法師

うらやます錦のたもとやなきさよりもあまるなかりに思ひける

待賢門院かくれさせ給ひてのちおほかたいつくも

てかへしふみてをたまひける日よませさ

まうしける

崇徳院御製

かきりなく人をこくはかるとも涙をそへてとゞめてし哉

御返し

上西門院兵衛

ちるまてにけふのわかれさへ涙しもとゝもにゆくかたなれ

かくいひけるわかれのたよりすらとくなりけり

のちなくなりにけるを人のとふらひて侍りけれは

読る

静厳法師

かなしさをとはれけるやなにはまでよそにみつとぞぬかなき世は

姉なる小侍従時ある上人のさゝまゐりけるす

そめけれけさとりて奉りてよりつかひのあきに

つかはすとてよめる　天台座主勝範

涅槃のたいつまをかしとおもふや君か衣なるらん

まうさせたまひける時ことのそかへさすれ

なきけるをきかせ給ひてよませ給ひける

鳥羽院御製

つねよりもむつましきかな時鳥しての山ちのともとおもへは

美福門院のかくれ給ひけると宣旨をそね

き侍りてよみ侍りける　久我内のおほいまうちきみ

いかにしてそめし衣きる日数のおほくもなかりけるかな

中納言伊實六條乃家にて月あかりけるにと

のちかきさふらひて九条のあたりにまかり侍

ける時こしらへかさつきを侍ける

大宮前太政おほいまうちきみ

あとひなくなりにし宿にさとわかれていはゝ家経

大納言公實かくれ侍りてそのちかき遠忌の日

よみ侍りける　花園左大臣室

うきふちは昔かはりに成まさりわかれはいまもなみたなかれて

大炊御門右大臣かくれ侍りてそのち七月七

日母の三位のもとにせうそこのついてに

つかはし侍りける　権大納言実家

七夕にかしはいかさぬ志ほしの袖もとしに露おきかれ

返し　三位 左大臣母

志ほしほの露けき袖は七夕もかはぬよつまて衣かへさん

待賢門院かくれさせたまひて後法金剛
院にて郭公なきけるをきゝて
仁和寺後入道法親王 覚性
あはれにもふることのせ河なるは誰とむかしを恋てなくらん
二条院の御事をなげきまして おかんわさの
よ後侍ける
法印澄憲
なき人をしのぶるゆきさとたふとへぬる思ひやる悲しき
おなじ御門の右大臣身まかりて後その家の
前をすぎて侍るに私記とりの侍るをとて
よみ侍ける
みさきおほきまうちきみ
なきへにそのよの氣色をみるにひとふにふえふるゝ悲しき
母の二位身まかりてのちよみ侍ける
民部卿成範
ありへ出しひや同そ思えれひとりや苔の下にくちなん
その後に侍けるかくれに又紀伊の二位身
まかりにける時よみ侍ける
藤原貞憲朝臣
うきありて母にはこそ夜深くりとこそ思ひしか
とひてりのやまる女身まかりにける時よみ侍る
左京大夫季能

みとせまてなれしハなれのちよてまふそらて別なりけり

故入道法親王かくれ侍りてのちいりくこまて

月をみて読侍りける　権少僧都命性

入かたのねまちれの月さとこひしきとや山のはの月

杉やのちかうにまうりて侍るにしをぬつとも

おりくみえ侍けれハよめる

左京大夫脩範

聖これハ昔乃侍やあまりあんそのもとにてね若丸下出

奈良にしてうかやきもろわらハのころつゝみに身を

かけて侍れハよめる

僧都範玄

なかとのふさきとひはみそ川そこれまりくしつゝまそへん

花そめにたた大臣の家よわたくしぬく侍るを笙

をこえ侍とて白まつりきろぬきをとゝへての

ちみれるあふに紙くやし侍けるとかふえにそへ

て侍ける　法印成清

とひさやきふるおもす筵のなといつく笙の音をそえ

ゝつふしく侍りける時母よ侍さたんしとあけ

きれりひ侍けるをその為ひなをこうりてのち

又よりあゆうりにをる時よめる

静縁法師

ゆきあはむことをしらぬにまかせてもみなし絶

周防のないしみまかりてのちかの

国にくだりけるときこえていひおくり

ける時よめる　藤原親盛

絶えんと思ひていふにいそ道をとみにしたまふこゝろを

仁和寺法親王道性蓮花心院にてかくれ給ふに

けるをこの月忌の日その墓所にまゐりけるに

山に雲かゝりて心ぼそく侍られければよめる

覚蓮法師　俗名隆範

山の端にたなびく雲やゆくへなくなりし煙のなごりなるらん

中納言顕長が墓所の堂にこもりて侍りける

にまゐりてよめる　法眼長真

年をへて昔を思ふ心のまゝにつもりてとふ茅原を

毋月はうつりにけりときこえける

顕昭法師

さらぬめやとまりて我をまつほどにかくる命なせそへ

同行の上人西住秋ころわづらふことありて限に

みえ侍りければよめる　円位法師

もろともにながめ／＼て秋の月ひとりにならんことぞかなしき

西住法師身まかりける時終りよく正念なり

きこえしとて圓位法師のもとにつかはし
ける　寂然法師

みたれすとをはりきくこそうれしけれさても別はなくさまねとも 九

圓位法師

この世にて又あふましきかなしさにすゝめし
人そこゝろみたれし

千載和歌集巻第十

賀歌

みこにおはしましける時とはとのにうつらせ
給へりけるほと八條院内親王と申ける時かの
御かたにて竹遐年友といへる心を講せられ
けるによませおはしましける

院御製

いくちよとかきらさりける呉竹や君かよはひのためしなるらん

後三條内大臣

うこきなきみかさ(まり)の竹のふしことにこもれるちよは君そかそへん

皇太后宮大夫俊成

秋の夜も君かみかきの呉竹はちよにいくよのかけをそふらん

いはひの心をよみ侍ける

大宮前太政大臣

君か代はあまねく山出の日よりてらさはつきしとそ思ふ

堀川院の御時立春乃わくさふまふ乃心を

つかうまつるへきよし侍けるハ養し侍ける

源俊頼朝臣

君かためみたらし河をわか水にむすふやちよのためしなるらん

おなし御時后宮にて花契遐年といふこゝろを

うへのをのこともはなたてまつりけるによませ給ひ

ける

堀河院御製

千とせまておりてみるへき桜花梢はるかに咲そめにけり

鳥羽院にて井杉を花をあまたしての庭花

年久といふ心をこれつかうまつりけるに

よみ侍ける

大納言忠教

植挂しわか木の梅に咲花は千よをとさてねよもひさしかり

堀河院の御時鳥羽殿に行幸日池上花

といふこゝろをよみ侍ける

権中納言俊忠

千世よむ池のみぎはの八重桜かげさへ底にふかくてぞみる

白河院ときこえし御時松契遐年

といふこゝろをよみ侍ける

源俊頼朝臣

神代よりひさしきためとやちとせまで岩ねの松に種をまきけん

京極のさきの太政おほいまうちぎみうちのおほいまうちぎみときこえける時高陽院

の家の歌合にいはひのこゝろをよめる

おちたぎつ底そこら川のきよき瀬に岩こす波は千世のかずかも

二條の太皇太后宮よりのいつきときこえけるとき

本院にて松枝映水といふ心をよみ侍ける

京極前太政大臣

千代やへむきみが家のありそ川松とこそふかくけふはさむ

堀河院の御時百首歌たてまつりける時

子日の心をよめる　二條太皇太后宮肥後

ひきとゞむとまつぞひさしき君がへん千世のためしは今日とはじめん

いはひの心をよめる　藤原基俊

松山のやまのおの桂君が代よりいくよひさしけれとかぞへすらん

保延二年法金剛院に行幸ありて菊契

多秋といふこゝろをよませたまひけるによみ侍

ける

法性寺入道前太政大臣

君か代をなか月はしめとしるき菊やちよまてせのしるしなるらん

花園左大臣

八重菊の匂ひにしるし君か世は千世の秋をかさねへしとは

八条前太政大臣

ちよやむかし神代のことも今かそとて御はしをとして菊の花

百首乃哥めしける時いまひのみんをよませ給ひ

けり

崇徳院御製

嵐も本の枝となるらむ山ひとさへ惜そ吹

二条院乃御時おかうらにたつまてをめ

て花を落色といふことをよませ給ひけるに

よまそ侍る　たのおもひはまかちる君

か世にさりけめ花も志りかほにさく花桜か

らん乃松のことも百首の哥あてさうりけり

とられいまひのみんをよませ給ひ侍る

二條院御製

志ら雲にまよふつまそふくる風にちる梅か香をさか

百首乃哥よみあまへけるけるのいそひける

武子内親王

うらみをく松万代の身のむこ翁や乃山の松風

摂政太政大臣よ侍りける時百首乃哥よませ給ける

よはひのうへ五そちにあまり給ける

皇太后宮大夫俊成

りうかひし給ひけるにこととしもやまはあるへし

二條院乃御時おほむいのみそかあつめて内裏に

侍りけるにおほんきよの町の哥よくいつめ

て詩与講し侍けるに鶴契遐年といふ心を

よみ侍ける　大炊御門右大臣

君か世はくもゐの鶴のかすならて雲ゐにちとせ宿ふ

閑院の家にてはしめて對松争齢といふこと

よみ侍ける　入道前太政大臣

千とせへん松の小松はひとつして万代まての友とこそみめ

源通親卿

萬代もなむつきさ宿に僧正は松そ君かかけとたのまん

高倉院の御時内裏にまいりて侍りけるに入

道のとふにえよ万歳楽とうたへあまりけるとりあ

てうけ給はりしまゝの日女房乃ともに中侍ける

右乃おとゝいまたしらさりし

萬乃ねの万代まてとうたひこゑと山もこたふるにちとせしか

入道太政大臣はしめて中院乃家にてよみ侍りける時

きみのかもよめる

修理大夫顕季

むまそかゝみのきしこふさゝきかすゝせもをむらさき家
あちゝるめのとしつふれ郷にのふしきのはり
うつとかまうへ侍を待けつふよめる

賀茂成助

三かさ山桂とうつる宿なれは月きんとそひかりそへける
後堀河院さかきのみやに侍りける時に
ひのくまをよめる

藤原孝善

きみか代はなかくてこそ松山の末の葉ことにすゝしかるらん
後一条院の御時長和五年大嘗会主基方
御屏風に備中国長田山のほとりにとひ
きみそひしあつとこゝろとよめる

善滋為政朝臣

千世とのみ御あそひにそよとふかき長田の山の峯の松せ
白河院御時嘉保元年大嘗会主基
方稲春歌田郷をよめる

前中納言匡房

ちやくさのさとれいのやれい月日そゝかひさこゝ
院乃御時久寿二年大嘗会悠紀方風
俗歌近江国まつりのうたとよめる

宮内卿永範

まつりこのすゑ行ゆくさかえしるしにはたくそめのわか松あると

平治元年大嘗会悠紀方風俗の歌　近江
国千坂浦をよめる　参議俊憲

君か代の数よみとりおく千坂の浦のまさこはかきりしらなむ

おなし時大嘗会主基方稲舂歌　丹波
国雲田村をよめる　刑部卿範兼

あめつちもさかゆるみよりも雲田の村にいねそみのれる

高倉院御時仁安三年大嘗会悠紀方の
御屏風の歌　宮内卿永範

寿をとく行へそまつせ君か代にあふ行の山の関の松むし

今上乃御時元暦元年大嘗会悠紀方
風俗歌三上山をよめる
藤原季経朝臣

ときはなるみかみの山の松むしや屋とよろつよのしるしなるらん

以下
３丁
白紙